青森県に於ける戦後開拓地
その1＝岩木山麓

石　岡　在　正

一　序

1945年以降，世界大戦による内外引揚者の社会復帰，食料難打開等の問題解決手段として，高冷地，傾斜地，軍用地等に数多くの開拓がくり広げられた。その後十数年，当初の計画調査の不備，自然条件の劣悪性等によって大部分の開拓地が窮乏を余儀なくされた。

近年，経済社会の変遷に伴ない，日本農業が激しい動きを要求されている今日，開拓当初，現実的問題解決として立地した開拓地は，新しい社会的役割を要求されつつある。

すなわち，食料自給という開拓地の基本命題は徐々に取り去られ，商業的農業への転化という新たな分野にその存在価値を見え出しつつある。

全国でも計画面積の40％（30年）を占める東北地方に位置する本県の開拓地は，ここ十数年どのような動向を示しているのか考察してみた。以前，横山弘氏（参考文献1.2.3.），今井六哉氏（参考文献2），渡辺茂蔵氏（参考文献4）によって行なわれたが，筆者は，その後の動向をもとに考察してみた。

二　自然環境

岩木山は弘前市の北西にある鳥海火山系に属する成層火山で，標高500m以上では比較的急傾斜を呈し，それ以下では広大な裾野を形成している。

気候的に見ると，一般に冬季はかなり低温を示すがいずれの山麓も7月を転機として急激に上昇し，8月を頂点としてかなりの高温となる。（長平では7月～8月の平均気温22.1℃，最高26°C）降水量は比較的多く，東麓は県内の多雨地に相当する。

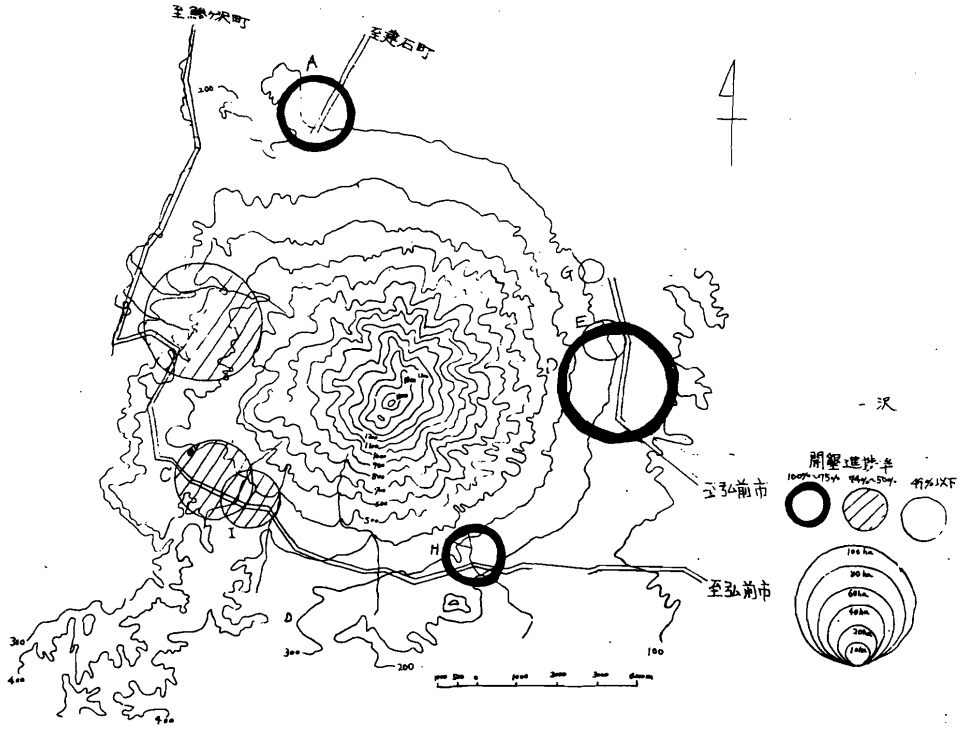
山麓の地形は，いずれも岩木火山による泥流地形である。そのため礫が多く，径1mを越すものさえ存在する。土壌は標高とともに変化し，400m～500m付近は表土が薄く15～20cmの厚さをもつ火山灰性の腐植質の黒色土壌である。標高300m以下になると，上部からの流亡土による才二次的堆積と見られる表土が，30～50cmの厚さを呈している。

山麓に発達する水系は，放射状にいくつかの沢として存在し，北流する中村川，東流する大秋川等へ合流する。

三　開拓地の分布

岩木山麓の開拓地は（図1），西麓に上鶴生，高杉，杉山，湯の沢，南麓に小森山，羽黒，岳，東麓に才二松平，北麓に才二長平の各開拓地がほぼ同心円的な分布をなしている。羽黒と岳は標高400m～500mの地域に，他は200m～300mの地域に位置する。いずれも

図 1.　　戦後開拓地分布図



沢水の利用可能な岩木火山泥流地域である。

規模はまちまちではあるが，最大のものは上鵜生の４３戸，９５.５ ha(昭４１年)，最小のものは湯の沢の２戸，9.3 ha（昭４１年）である。（表１）

表１　入植現在戸数その他　（昭和４１年）

地区	入植現在戸数	入植年度	平均標高	計画農用地 総数(a)	計画農用地 戸当り	現在耕地面積 総数(b)	現在耕地面積 戸当り	作付面積 (C)	開墾進捗率 (b)÷(a)	土地利用率 (C)÷(b)
才二長平	19戸	昭和27年	200m	68.1ha	3.58ha	75.7ha	3.98ha	76.6ha	111.1%	101.1%
才二松平	18	28	250	90.4	5.02	52.3	2.90	52.2	57.8	99.8
岳	10	24	450	63.8	6.38	37.6	3.76	38.1	58.9	101.3
上鵜生	43	21	280	95.5	2.22	79.6	1.85	80.9	83.3	101.6
高杉	6	21	280	24.2	4.03	8.7	1.45	9.0	35.9	103.4
杉山	23	22	250	73.0	3.17	52.9	2.30	54.2	72.5	102.4
湯の沢	2	20	150	9.3	4.65	3.1	1.55	3.2	33.3	103.2
小森山	8	25	280	46.0	5.75	40.5	5.06	40.5	88.0	100.0
羽黒	10	28	550	48.9	4.87	27.7	2.77	28.3	56.6	102.2
計	139			519.2	3.73	378.1	2.72	383.0	72.8	101.3
青森県	4.128			199536	4.83	124899	3.02	129420	62.6	103.6

四　農業経営

一般に農業経営を規制する条件は，オ一に外部的要因である農業立地条件，オ二に内部的要因である経営資本並びに経営者能力，オ三に経営主体の経営意図である。経営形態が以上のような条件によって規定づけられるとするならば，経営形態の三指標であるⅠ地目構成，Ⅱ土地利用，Ⅲ生産目的より各地域の規制要因を把握できるとともに，開拓地農業の展開構造を明らかに出きよう。

1. 地目構成

自然的制約の大きい火山麓に於いては，水田経営を実施する事は非常に困難である。それ故水田経営を確立するにせよ長い期間を費やすのは必然である。更に水田を経営するには，労働的に，時間的に不合理性を生みだす。たしかに自家飯米を確保し，経済的安定を生み出す水田経営は，開拓者にとっては魅力であるが，前記のような理由によって，開田能力をもたない初期開拓に於いては水田経営はまれであり，大部分は畑地経営が主体となる。

しかし，３７年以降，県の指導，農業機械の導入，農業技術の発達，資金援助等によって水田経営農家が増加し，水田造成がめざましい（表２）が，依然火山灰土による漏，かけながし灌漑による水温低下などの問題が残されている。

表２　年度別作付面積割合　　A（オ二長平）

作物群	S 29年		31年		33年		35年		37年		39年		41年	
	面積ha	比(%)	面積	比	面積	比	面積	比	面積	比	面積	比	面積	比
水　稲	1.9	3.6	2.0	5.4	2.6	4.1	4.7	8.6	6.2	11.8	10.5	15.3	107	142
陸　稲	2.0	3.8	1.0	2.7	0.2	0.3								
麦類（大麦，小麦 ライ麦）	0.1	0.2	1.3	3.5					0.2	0.3				
いも（ばれいしょ）	10.0	18.8	8.9	24.0	7.5	11.9	7.7	14.1	7.4	14.1	9.5	13.8	9.2	122
雑穀（とうもろこし あわ，ひえ，きびそば）	7.2	13.5	7.1	19.1	5.6	8.9	1.4	2.5	1.7	3.2	1.0	1.5	3.9	52
豆類（大豆，小豆 えんげん）	16.0	30.1	2.1	5.7	20.8	33.0	17.2	31.4	6.5	12.4	7.8	11.4	7.9	105
蔬菜（大根，きゃべつ，すいか，白菜，かぼちゃ）	6.0	11.2	2.0	5.4	2.0	3.2	0.9	1.7	3.2	6.1	7.7	11.2	2.4	32
工芸（ナタネ，ゴマ ビート）	8.0	15.0	11.3	30.4	17.3	27.4	16.8	30.6	22.3	42.4	28.1	41.0	31.9	424
果実（リンゴ，ブドウ）					1.0	1.6	1.0	1.8	0.4	0.8				
飼料（青刈，とおもろこし，採実えん麦 牧草）	2.0	3.8	1.4	3.8	6.1	9.6	5.1	9.3	4.7	8.9	4.0	5.8	9.3	123
計	53.2	1000	37.1	1000	63.1	1000	54.8	1000	52.6	1000	68.6	1000	753	1000

B（才二松平）

作物群	S29年 面積ha	S29年 比(%)	31年 面積	31年 比	33年 面積	33年 比	35年 面積	35年 比	37年 面積	37年 比	39年 面積	39年 比	41年 面積	41年 比
水稲									15.2	26.8	7.7	11.8	11.3	22.1
陸稲	0.1	1.6	1.5	3.6	2.5	4.9	6.3	14.7	5.0	8.8	2.0	3.1		
麦類			0.9	2.2										
いも	4.8	76.2	6.7	16.2	4.0	7.8	2.8	6.6	1.6	2.8			1.0	2.0
雑穀			7.4	17.9	10.8	21.0	5.0	11.7	3.7	6.5	3.9	6.0	0.4	0.8
豆類	0.8	12.7	10.2	24.6	9.6	18.7	8.7	20.3	7.0	12.4	3.1	4.7	5.2	10.2
蔬菜	0.6	9.5	4.0	9.6	2.8	5.4	2.7	6.3	1.7	3.0	1.7	2.6	1.3	2.5
工芸			6.7	16.2	16.0	31.1	12.3	28.7	19.8	34.9	8.5	13.0	0.1	0.2
果実			0.2	0.5			0.1	0.2	0.4	0.7				
飼料			3.8	9.2	5.7	11.1	4.9	11.5	2.3	4.1	38.4	58.8	31.8	62.2
計	6.3	1000	41.4	1000	51.4	1000	42.8	1000	56.7	1000	65.3	1000	51.1	1000

C（岳）

作物群	S29年 面積ha	S29年 比(%)	31年 面積	31年 比	33年 面積	33年 比	35年 面積	35年 比	37年 面積	37年 比	39年 面積	39年 比	41年 面積	41年 比
水稲	3.2	18.0	3.9	14.9	3.7	10.3	4.5	12.1	6.9	16.2	3.2	7.3	6.9	18.6
陸稲							0.5	1.4						
麦類	0.4	2.2												
いも	2.8	15.7	3.5	13.4	4.1	11.5	5.9	15.9	3.5	8.3	6.1	14.0	2.5	6.8
雑穀	3.4	19.1	7.0	26.7	8.0	22.3	7.9	21.3	4.3	10.1	1.8	4.1	2.6	7.0
豆類	3.2	18.0	3.1	11.8	4.5	12.6	5.9	15.9	9.4	22.1	5.9	13.5	4.0	10.8
蔬菜	1.6	9.0	1.9	7.3	1.8	5.0	2.4	6.5	4.0	9.4	3.7	8.5	1.0	2.7
工芸	1.0	5.6	4.3	16.4	6.7	18.7	8.8	23.7	9.4	22.1	12.6	29.0	3.8	10.2
果実														
飼料	2.2	12.4	2.5	9.5	7.0	19.6	1.2	3.2	5.0	11.8	10.3	23.6	16.3	43.9
計	17.8	1000	26.2	1000	35.8	1000	37.1	1000	42.5	1000	43.6	1000	37.1	1000

D（上彌生）

作物群	S29年 面積ha	S29年 比(%)	31年 面積	31年 比	33年 面積	33年 比	35年 面積	35年 比	37年 面積	37年 比	39年 面積	39年 比	41年 面積	41年 比
水稲	5.8	11.2	4.8	8.8	5.4	5.9	3.5	4.1	4.8	5.9	3.0	4.8	5.0	6.3
陸稲	9.5	18.4	6.7	12.3	11.8	12.9	3.1	3.6	11.9	14.6	17.0	27.5	9.4	11.8
麦類									1.1	1.3				
いも	6.5	12.6	4.1	7.5	8.0	8.8	12.5	14.5	2.9	3.5	2.2	3.6	3.5	4.4
雑穀	4.0	7.8	5.1	9.3	12.8	14.1	20.0	23.2	1.9	2.4	0.1	0.2		
豆類	17.4	33.7	25.4	46.5	20.2	22.2	15.4	17.9	22.9	28.0	3.6	5.8	3.4	4.3
蔬菜	6.1	11.8	3.2	5.9	8.7	9.5	15.2	17.7	9.4	11.5	2.9	4.7	3.5	4.4
工芸	1.8	3.5	4.7	8.6	21.0	23.1	16.4	19.0	18.9	23.1	13.2	21.3	7.1	8.9
果実	0.5	1.0	0.6	1.1	0.8	0.9			7.6	9.3	18.4	29.7	26.4	33.1
飼料					2.4	2.6			0.3	0.4	1.5	2.4	21.4	26.8
計	51.6	1000	54.6	1000	91.1	1000	86.1	1000	81.7	1000	61.9	1000	79.7	1000

E（高　杉）

作物群	S 29年 面積ha	比(%)	31年 面積	比	33年 面積	比	35年 面積	比	37年 面積	比	39年 面積	比	41年 面積	比
水　稲														
陸　稲	1.0	3.9					1.1	3.5	1.8	5.7	2.5	17.1	2.0	23.8
麦　類	0.8	3.1					0.7	2.3						
い　も	5.9	23.1	3.1	11.6	3.6	13.8	0.7	2.3	3.7	11.6	2.6	17.8	0.1	1.2
雑　穀	0.6	2.4	1.6	6.0	3.1	11.9	7.7	24.9	2.5	7.9	0.1	0.7		
豆　類	12.1	47.5	18.4	68.9	10.9	41.8	6.7	21.7	11.1	34.9	1.5	10.3	0.5	6.0
蔬　菜	1.5	5.9	1.4	5.3	2.3	8.8	12.8	9.1	3.4	10.7	1.5	10.3	0.7	8.3
工　芸	3.6	14.1	2.2	8.2	5.8	22.2	10.8	34.9	6.9	21.7	2.9	19.8	1.3	15.5
果　実							0.4	1.3	0.3	0.9				
飼　料					0.4	1.5			2.1	6.6	3.5	24.0	3.8	45.2
計	25.5	1000	26.7	1000	26.1	1000	30.9	1000	31.8	1000	14.6	1000	8.4	1000

F（杉　山）

作物群	S 29年 面積ha	比(%)	31年 面積	比	33年 面積	比	35年 面積	比	37年 面積	比	39年 面積	比	41年 面積	比
水　稲	3.4	9.7	3.5	9.2	2.0	5.0	1.6	3.4	2.2	5.5			2.7	5.4
陸　稲	0.3	0.9					2.1	4.4	3.7	9.3	10.2	19.9	4.0	8.0
麦　類			0.1	0.3					0.3	0.8				
い　も	3.5	10.0	5.7	15.1	2.8	7.0	7.5	16.0	1.7	4.3	7.2	14.0	1.2	2.4
雑　穀	5.5	15.7	6.0	15.9	6.5	16.1	9.5	20.1	0.9	2.3	0.9	1.7	0.6	1.2
豆　類	14.0	39.9	8.6	22.8	3.6	9.0	9.6	20.3	5.5	13.9	6.6	12.9	4.2	8.3
蔬　菜	2.5	7.1	5.0	13.2	12.7	31.6	7.6	16.1	2.9	7.3	6.4	12.5	1.2	2.4
工　芸	4.3	12.2	6.9	18.2	10.8	26.8	9.3	19.7	11.8	29.8	11.9	23.2	3.5	7.0
果　実	1.6	4.5	1.1	2.9	1.4	3.5			9.5	24.0			17.3	34.4
飼　料			0.9	2.4	0.4	1.0			1.1	2.8	8.1	15.8	15.5	30.9
計	35.1	1000	37.8	1000	40.2	1000	47.2	1000	39.6	1000	51.3	1000	50.2	1000

G（湯の沢）

作物群	S 29年 面積ha	比(%)	31年 面積	比	33年 面積	比	35年 面積	比	37年 面積	比	39年 面積	比	41年 面積	比
水　稲	0.1	1.4	0.3	3.0	0.4	3.3	0.1	0.7	0.2	1.6				
陸　稲			0.3	3.0	0.5	4.0	0.3	2.0	1.3	10.1	8.6	79.6	1.0	33.3
麦　類														
い　も	0.4	5.5	0.4	4.0	0.5	4.0	2.2	14.8	0.6	4.7	0.4	3.7	0.2	6.7
雑　穀			2.3	23.0	1.2	9.7	2.6	17.4	1.5	11.7	0.5	4.7		
豆　類	6.2	84.9	3.6	36.0	3.1	25.0	3.1	20.8	2.8	21.9	0.4	3.7	0.2	6.7
蔬　菜	0.6	8.2	1.2	12.0	0.6	4.8	2.2	14.8	1.1	8.6	0.1	0.9		
工　芸			1.5	15.0	4.7	37.9	4.4	29.5	3.3	25.8	0.8	7.4	0.4	13.3
果　実			0.4	4.0	1.4	11.3			1.9	14.8			1.2	40.0
飼　料									0.1	0.8				
計	7.3	1000	10.0	1000	12.4	1000	14.9	1000	12.8	1000	10.8	1000	3.0	1000

H（小森山）

作物群	S 29年 面積ha	S 29年 比(%)	31年 面積	31年 比	33年 面積	33年 比	35年 面積	35年 比	37年 面積	37年 比	39年 面積	39年 比	41年 面積	41年 比
水稲					0.5	4.2	0.6	2.8	0.6	3.7			0.7	1.8
陸稲							0.1	0.5						
麦類	0.2	1.4	0.2	1.6			0.1	0.5						
いも	1.0	7.2	1.5	12.2	1.3	10.9	1.9	8.8	1.7	10.6	2.5	17.9	0.9	2.3
雑穀	1.1	7.9	1.0	8.1	2.3	19.3	2.4	11.2	2.9	18.0	1.4	10.0		
豆類	6.8	48.9	4.6	37.4	2.2	18.5	3.2	14.9	3.5	21.7	2.5	17.9	0.8	2.0
蔬菜	0.8	5.8	1.0	8.1	0.5	4.2	8.3	38.6	1.2	7.5	2.7	19.3	1.2	3.1
工芸	3.3	23.7	3.2	26.0	3.0	25.2	2.9	13.4	3.2	19.9	3.1	22.1		
果実	0.5	3.7	0.4	3.3	2.1	17.7	2.0	9.3	2.6	16.1			3.3	8.4
飼料	0.2	1.4	0.4	3.3					0.4	2.5	1.8	12.8	32.2	82.4
計	13.9	1000	12.3	1000	11.9	1000	21.5	1000	16.1	1000	14.0	1000	39.1	1000

I（羽黒）

作物群	S 29年 面積ha	S 29年 比(%)	31年 面積	31年 比	33年 面積	33年 比	35年 面積	35年 比	37年 面積	37年 比	39年 面積	39年 比	41年 面積	41年 比
水稲									0.8	2.2			2.9	10.8
陸稲					0.2	1.0	2.4	7.8	1.8	5.0	1.8	6.1	0.6	2.2
麦類							1.5	4.9	0.2	0.6				
いも	0.4	14.3	1.7	16.8	2.4	12.2	2.0	6.5	1.4	3.9	2.7	9.1	1.9	7.1
雑穀	1.3	46.4	1.2	11.9	7.0	35.7	7.8	25.3	6.6	18.5	2.1	7.1	0.9	3.3
豆類	0.5	17.9	1.2	11.9	2.7	13.8	3.7	12.0	9.5	26.6	3.0	10.1	2.1	7.8
蔬菜	0.3	10.7	0.5	4.9	1.6	8.2	4.1	13.3	5.2	14.6	4.5	15.2	1.8	6.7
工芸			3.1	30.7	4.7	24.0	8.7	28.3	7.3	20.4	8.3	28.1	1.9	7.1
果実														
飼料	0.3	10.7	2.4	23.8	1.0	5.1	0.6	1.9	2.9	8.1	7.2	24.3	14.8	55.0
計	2.8	1000	10.1	100.0	19.6	1000	308	1000	35.7	1000	29.6	1000	26.9	1000

2. 土地利用

言うまでもなく開拓地の基本的命題は，入植者の自給生活の確立にある。安定した営農を確立するためには，火山麓という自然条件の制約のなる地域に於いて時間的経過を必要とするのは当然である。そのため最初は，食料自給のため暗中模策，試行錯誤的にその作用は多様に展開され，土地利用も幾多の作物の複合経営によるものが多い。〔表2（29年〜35年）〕そこで共通する事は，29年〜35年頃までは自給作物を中心とし，それに加えて換金作物（工芸，豆類）を組合せた土地利用形態である。

しかし，37年以降は徐々に主体となる作物が現われ，単作的土地利用経営を行なってくる。（表3）

3. 生産目的

開拓地の生産目的は，入植当初の目的を考えると自給的経営ということは明瞭であろう。ただし，自給的経営といっても，全くの自給作物だけの栽培を行なうのではなく，開拓初期に於いては，食料購入の資金源として換金作物の栽培が当然行なわれる。更に，無市場地域に於い

ては，家検労働商店化が進められる。そこで，自給作物栽培（稲作）の規制要因が大きければ大きいほど商品化率の高い作物，すなわち，商品生産的経営（果樹，牧畜，工芸）が為されやすい。ただし社会条件（交通，市場）の影響が大きい。

表3　土地利用形態

	S29年～35年	S37年～41年	備　考
才二長平	豆類，工芸，いも類による複作	工芸主体の複作	
才二松平	豆類，工芸による複作	飼料主体の複作	表4参照
岳	雑穀，工芸による複作	飼料主体の複作	表4参照
上彌生	豆類，工芸，雑穀による複作	果樹主体の複作	
高　杉	豆類，工芸による複作	飼料，陸稲による複作	表4参照
杉　山	工芸，豆類，雑穀による複作	果樹，飼料による複作	表4参照
湯の沢	工芸，豆類，雑穀による複作	果樹，陸稲による複作	
小森山	工芸，豆類による複作	飼料主体の複作	表4参照
羽　黒	工芸，雑穀による複作	飼料主体の複作	表4参照

五　開拓地の資本並び経営者能力

入植者の資本は皆無であると言っても過言ではあるまい。すなわち，入植者の資本の規定者は政府である。政府貸付金一戸平均20万円～30万円と，広大ではあるが劣悪な土地，歴史的な農機具によって彼らは出発を余儀なくされた。岩木山麓の入植者は，周辺の引揚者，周辺の次三男によるものが多く，農業経験者が多いが，不良な土地を即座に可耕地に換える能力は持ち合わせていなかった。伐根，礫の除去，用水の確保，土壌の流亡止等は，入植者の一部に能力の限界を感じさせた。

六　開拓地の経済性

初期開拓地に於ける経済的基盤は，政府資金等の借入金である。本来，これらの資金は，農業経営手段である土地，農業機械，農業技術等に環元されるべきものである。しかし，極度の自然的制約は，土地生産性，労働生産性の向上を阻害し，開拓意欲を衰退させ，窮乏生活を継続せしめる。そこで，食生活維持のため，開墾作業，土地改良作業への労力投下が不充分となり，営農確立への時間的遅れを促がす結果となるばかりではなく，借入金の日常生活への消費が行なわれる。

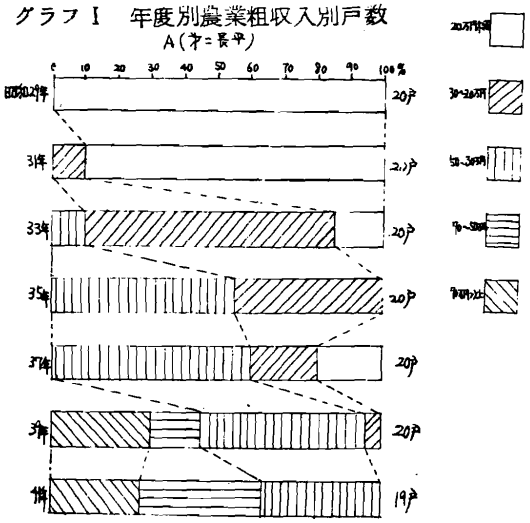
すなわち，火山麓特有の礫の散在，酸性土壌，漏水，表土の流亡等によって，絶対的生産増加をはかる可耕地拡大，相対的生産増加をはかる農業技術の発達等による土地生産性の向上の遅れは，農業経営の確立を遅れさす。そのため，食生活が安定するまでの間の生活は，借入金の消費という形で現われてくる。それによって，借入金の経営手段への環元が不充分となり，増々営農確立の時期を遅らす原因となる。このような悪循環をくりかえす事を見ても，戦後の開拓政策がいかに利潤的であるかがうかがわれる。

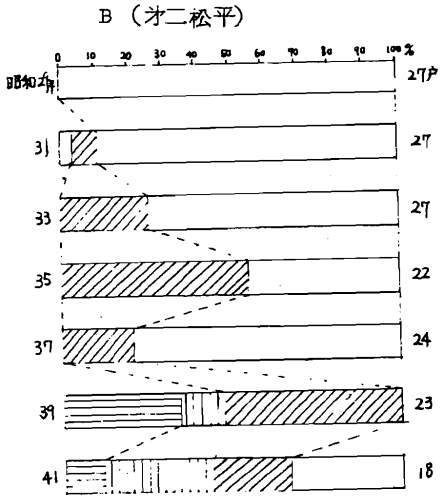
グラフ1によると，30万円～50万円農家が安定して現われたのは，才二長平をのぞきい

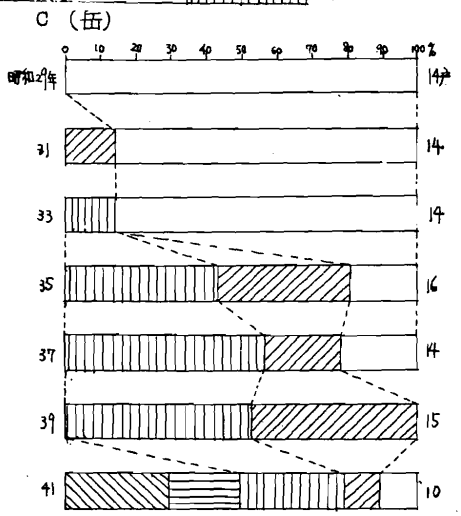
ずれも３７年以降である。上彌生，高杉湯の沢地区は粗収入の高い農家が他の地区に比べ非常に少ない。この事は離村農家が他の地区よりも多い事にも関連している。

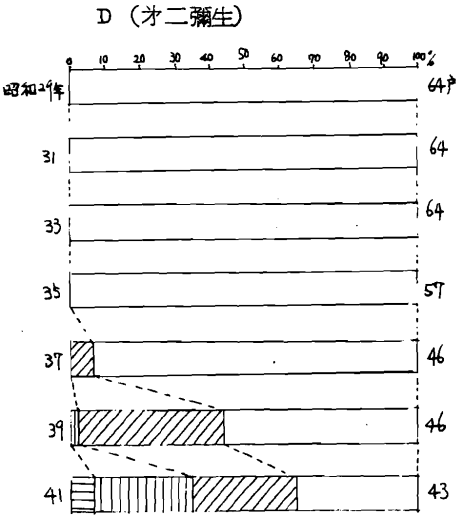
３９年〜４１年頃になるとほぼ離村農家も減少し，開拓地の営農は落ちつきを見せはじめ，栽培作物にも安定が見られて来たのは経済的にも向上して来た事がうかがわれる。（グラフＩ）

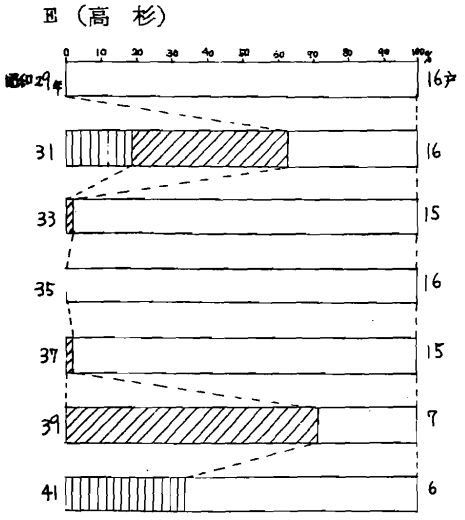
グラフＩ　年度別農業粗収入別戸数

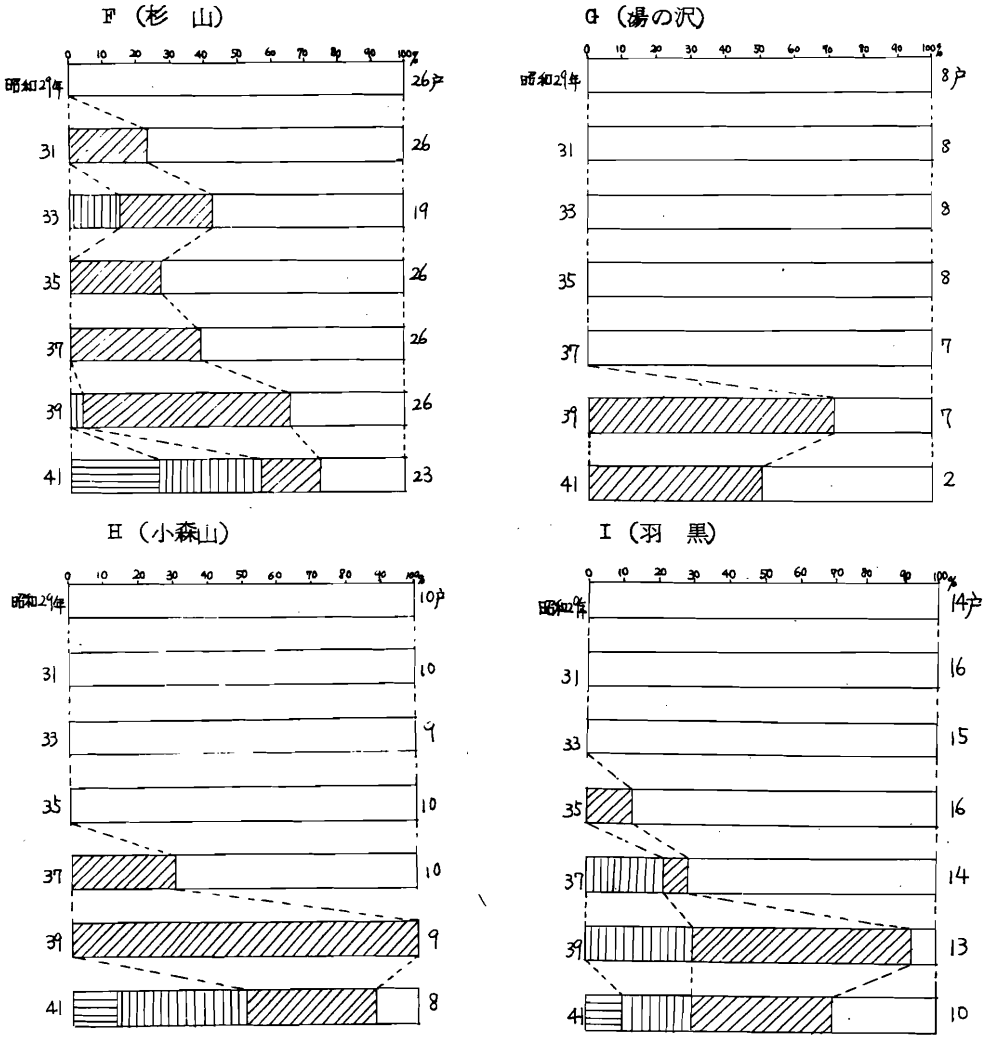












しかし，全面的に営農が確立したと考えるのは早計である。３９年～４１年に於いて農外収入の占める割合が多いものでは５０％も占めており（表５），３９年より４１年の方が兼業化が進んでいる。（表６）この事は，農作物栽培への労力投下を減ずる働きを示す事ともなる。開拓地にかぎらず日本の農業の労力不足は，土地の生産性を低下させる一面を持っている。（表７）しかし，開拓地にかぎり考えて見れば，土地にへばりついていた時代から外へ向う動きが生れたとも言えよう。

作付作物の整理，経済生活の安定への作用による経営意図の重点的設定，すなわち，商品作物の設定，牧畜の普及並び促進，労働の商品化を地域性に応じ推進して行こうとしている。しかし，商業的農業の欠陥である価格変動性の防波堤としての水田耕作も，一面では行なわれている。

表 4　家畜頭数

地区	S 35年 乳牛	S 35年 羊	S 35年 豚	S 35年 にとわり	S 37年 乳牛	S 37年 羊	S 37年 豚	S 37年 にとわり	S 39年 乳牛	S 39年 羊	S 39年 豚	S 39年 にとわり	S 41年 乳牛	S 41年 羊	S 41年 豚	S 41年 にとわり
才二長平		31	35	55		4	94	20		9	192	62			116	60
才二松平		4	4	306		8	9	165		8	16	20	1	2	2	41
岳		9	1	485		5	1	550	22		23		25		1	310
上彌生		1	10	280		20	23	10			12	10		1	72	
高杉		1		36		5		25			35		8			
杉山		5	4	140		5		128	1		12		8			30
湯の沢																
小森山			24	120		1	24	139			26				15	
羽黒		8	8	286		5	3	146	29		10		21	3	10	45

表 5　農家収入

地区	昭和39年 耕種収入 実収	耕種収入 割合	畜産収入 実収	畜産収入 割合	農外収入 実収	農外収入 割合	総収入	昭和41年 耕種収入 実収	耕種収入 割合	畜産収入 実収	畜産収入 割合	農外収入 実収	農外収入 割合	総収入
	千円													千円
才二長平	8720	545%	5760	359%	1530	95%	16010	8510	636%	2736	204%	2145	160%	13391
才二松平	3896	399	1046	107	4831	494	9773	4000	436	1211	132	3960	432	9171
岳	3853	748	828	161	470	91	5151	2863	500	2568	448	300	52	5731
上彌生	8308	698	427	36	3160	266	11895	9937	710	1153	82	2903	208	13993
高杉	4742	710	740	111	1200	179	6682	6989	589	2653	224	2220	187	11862
杉山	1360	804	42	25	290	171	1692	503	244	851	415	700	341	2054
湯の沢	336	573			250	427	586	395	467			450	533	845
小森山	1374	561	725	296	350	143	2449	1709	453	693	184	1370	363	3772
羽黒	2633	785	520	155	200	60	3353	1681	463	1065	294	880	243	3626

表 6.　専兼別戸数

地区	昭39年 専業	昭39年 才1種	昭39年 才2種	昭41年 専業	昭41年 才1種	昭41年 才2種
才二長平	6戸	13戸	1戸	5戸	12戸	2戸
才二松平		10	13		10	8
岳	15			5	4	1
上彌生	18	19	9	15	16	12
高杉	6	1		1	3	2
杉山	22	1	3	6	13	4
湯の沢		2	1		1	1
小森山	7	1	1	2	4	2
羽黒	9	3	1	5	3	2

表 7　作物反収

地区	水稲 S31年	水稲 S41年	大豆 31	大豆 41	小豆 31	小豆 41
才二長平	240kg	218kg	168	100	144	61
才二松平		232	77	100	58	93
岳	150	206	103	67	100	56
上彌生	270	446	65	80	173	76
高杉			103	100	245	100
杉山	480	467	103	121	230	64
湯の沢	300		77	100	100	70
小森山		329	103		100	88
羽黒		171	103	145	58	100
県開拓地平均	300	346	116	108	86	76
県平均						

ばれいしょ 31	ばれいしょ 41	大根 31	大根 41	キャベツ 31	キャベツ 41	はくさい 31	はくさい 41	すいか 31	すいか 41	ナタネ 31	ナタネ 41	ビート 31	ビート 41	リンゴ 31	リンゴ 41
2063	1288	3750	2236	5625	1825		2283	4500		144	113		109		
1050	880	3750	2375	2250	1375		1975	1125	1100	180	300				
1125	420	3750	1125	1125	750		1050	1875		120	107		3164		
1688	717	3000	1720	2123			1267	938	1500	204	92			383	414
1125	700	1875	1400	750			1467	375		132	85				
2224	2117	5625	2364	3750			2450	2250		300	68		3000	38	460
1084	1650	1125		1125				1125		120	100			11	325
1125	533	2813	1243	3000	900		750	1125	1200	216				90	591
1163	505	1875	1125	2250	975		1317			168	130		2100		
1654	844	2606	2374	2055	2088		1966	1493	1489	156	239		2395	128	590

七　社会環境

前記したように，商業的農業経営を規制する要因として，市場，交通等の社会条件があげられる。更に，開拓地の農業経営には既存地域（木村，戦前開拓地等）との関連が深い。

山麓開拓地は，一般に分散的小市場をもつものが多い。岩木山麓の開拓地に於いては，才二長平は建石町を経て五所川原市，ないしは，弘前市に依存する。才二松平は鰺ケ沢に依存し，他は全て弘前市に依存する。（図1）市場の大小によって，商業的，とくに生乳生産地域は規定されてくる。すなわち，弘前依存地域に限られ酪農家が存在している。（表4）しかし，これは単に弘前市に距離的に近いだけではなく，冬期間の交通（積雪による交通遮断）にも関連してくる。羽黒，岳を中心とするこの地域は，岩木スカイライン開設による道路整備に加え，岩木スキー場，百沢，岳温泉への観光客確保のための地元ならびに弘南バス会社による冬期間の交通確保が酪農への転化を可能ならしめた。言うまでもなく，酪農経営確立のためには，市場の消費水準の向上，県を中心とする地方公共団体の指導，援助が必要なのは当然である。

市場，交通等の条件が備わらない地域に於いては，才二長平のナタネ，才二彌生の養豚，リンゴ栽培による商業的農業の採用が見られる。しかし，才二長平のナタネ栽培にしても，広大な高原地域を有しているものの，本村のナタネ栽培に影響されたものであるし，才二彌生のリンゴ栽培，くずリンゴを飼としての養豚も本村の彌生に影響された面が多い。更に，羽黒，岳地区に於いての酪農，水田経営は，既存の枯木平，新設の岩木実験農場の営農形態に刺激されたものである。

八　結　び

戦後開拓地は，幾多の問題，矛盾を含みつつも２０余年を経過した。食料自給を大前提としたこれらの開拓地は，試行錯誤しながらも，自然的制約を克服し，地域によっては営農を確立したと見てよいであろう。（但し，数多くの離農者，犠牲者を現出せしめた。）

以下早計ではあるが，一応まとめてみた。

1.農業上未熟な時期に於いては，食料購入手段として換金作物主体の形態を示す。

2.１９５５年以降の急激な工業発展は，大都市ばかりでなく，小都市に於ける消費経済を刺激し，農業形態に影響を与えた。

3.昭和３５年〜昭和３７年は，開拓農業の過渡期（経済社会の変化並び現実問題解決手段より国土の開発への移向）である。

4.酪農経営可能地域は，市場，交通が主要因となっている。

5.自家飯米確保，経済的安定をはかるため，自然制約を克服（時間的経過を必要とする）し水田を確保しようとする。

6.商業的農業化への歩みは既存地域との関連が深い。

7.積雪地域特有の現象である他産業への労働力転化（出稼ぎ等）は，経済的基盤の弱い開拓地に於いては必然である。

8.弘前市の経済圏に含まれる地域と他地域とには経営形態に差異が見られる。

9.現在閉鎖されたが，富士精糖への原料供給としてのビート作付は，岩木山麓では顕著ではない。（六戸への輸送の問題）

10.兼業農家率は，酪農家ほど低い。

11.借入金の返済が未了のため，資金の農業手段への投入は充分ではない。（機械化普及率低）

＜参考文献＞

1.横山弘（1959）東北地方における戦後開拓地の不振要因

2.今井六哉，横山弘（1963）岩木山南麓開拓地の土地利用

3.横山弘（1965）岩木山麓の開発と集落

4.渡辺茂蔵（1968）岩木実験農場の構造

5.福井英夫（1967）才二次大戦後の開拓

6.水野裕（1961）岩木山麓の地形

7.東畑精一，磯辺秀俊（1965）農業生産の展開構造

8.農林省（1956）開拓地の土壌の概要

9.青森県（1954～1966）開拓地営農実績調査